

## 若手教員の悩み

足立和彦（大阪産業大学）

林千宏（港区区民センター）

谷口智美（大阪薬科大学）

今年で三度目を迎えるアトリエ「若手教員の悩み」は、今年も新たにフランス語教育に携わった二人の教師を迎え開催された。今回発表する教員のうち、一人は大学、もう一人は区民センターという生涯教育の場でそれぞれ初級フランス語を教えている。両者の教育環境を簡単にまとめてみると

発表者名 (敬称略)	教育機関	対象	人数	使用テキスト	その他の 使用機器
足立	大学	大学 1～3 回生	10 人	フランス語でサバイ バル <sup>1</sup> 白水社	
林	区民セン ター	一般	8 人	ニュー・エクスプレ ス <sup>2</sup> 白水社	パワーポ イント <sup>3</sup>

となる。異なる機関で教えている両氏の悩みを簡単に紹介し、参加者と共に考えた解決法を述べ、そこから導き出される「若手教員の悩み」に対する回答を探っていく。

### 発表要旨 足立和彦

私の「悩み」の第一は、何人かの学生が授業中に居眠りをすることであり、それに対する対応が難しかったことです。結果的に、授業内容に付いてくる学性と、付いてこられない学生との間に差が生まれ、どの学生を対象に授業を進めるべきなのか、という照準の難しさがついて回りました。また、居眠りの有無はともかくとしても、学習意欲の乏しい学生にいかにも習得させるかということの難しさを実感する一年となりました。

<sup>1</sup> 全学年統一テキスト

<sup>2</sup> 入手容易、独学用に適していると考え採用。

<sup>3</sup> 授業が単調になることを避けるため、パワーポイントの映像による文法説明、また文化紹介のために写真や映像を多用した。

対策としては、まず、フランス全般についての話題を提供し、フランス語、フランス文化に対する関心を生むことを心がけました。次に、授業を散漫にしないために、練習問題を頻繁に与え、学生自身が声と手を使って練習する時間をなるべく多くするようにも試みました。時にフランスの音楽を鑑賞し、気分転換とともにフランス語の聞き取りの実践も行いました。最後に、期末試験直前には、試験対策の時間を設け、復習に取り組みました。いずれも、多少なりとも効果がありながらも、全体的に著しく態度の変化が見られるようなことは少なく、今後さらに授業内容に工夫の余地があるように考えています。

今後の課題としては、文法説明等において、間延びした説明を排除することがまず必要と考えています。教師の側から一方的に説明を押しつけるのではなく、学生自身が考え、理解してゆくような過程を作っていくのが理想ではないでしょうか。同時に、各時限において、習得すべき目的を明瞭化することで、学生に明確な目標と達成感を与えられるように努めることが、学習意欲の維持に貢献するように思います。では、教材・教授法を具体的にどう工夫してゆけばいいか。その実践的な知恵を、出席者とともに話し合いたいと考えました。

### 参加者からの意見

眠っている学生はおそらく「自分のことは見ていないだろう」と思っている。名指しで話しかけることによって、自分が見られているという意識を持つであろう。また教科書記載のディアログを、学習者同士で練習するなどのペアワークを取り入れ、教師対学生だけの授業形態に変化をつけ、授業に能動的に参加できるように導いていくのも一つの方法ではないか。学習者間の差は、理解している学生がそうでない学生に説明する機会を与えるなどして、学生同士の意見交換の場を持てるように教師が授業を運営することもできるのではないだろうか。

気分転換のために提供する音楽や文化紹介に関しては、その選択が大きく結果に影響する。少人数クラスの利点を生かし、教師側が「今学生が何に興味を持っているのか」と尋ねれば、どのような音楽・文化を紹介すればよいのか絞り込むことができる。

### 発表要旨 林 千宏

1. ついてこられる受講生とそうでない受講生の差にどう対処するか。

私が教えているのは大学とは異なり、最初からフランス語やフランス文化に興味のある方ばかりを対象としていますので、どのようにモチベーションを上げるか、という問題は基本的にありません。ただ、それでもやはり理解度という部分にモチベーションの差が現れてくるのかもしれないかもしれません。クラスの中でもどんどん動詞の活用を覚えていく方と、いつまでも覚えられない方という違いが現れてきました。ただここでフランス語を勉強されている多くの方は、楽しみのために勉強されていますので、あまりにテストなどでプレッシャーをかけないほうが良いのではないかと、とも考えました。

**参加者からの意見：**生涯学習の場であるのだから、文法事項を基準に全体の進度を考えなくてもよいのでは。そうではなく、Portfolioのようなものを利用して、それぞれの受講生に対してどこまで分かっているか、あるいはいないかを自身で把握してもらうという方法はどうか。

## 2. 会話練習の効率のよい進め方：受講生に参加してもらう場合の時間の配分

例えば自己紹介、あるいは複合過去を勉強した場合に、週末をどのように過ごしたかなどを一人一人フランス語で表現してもらいましたが、こういった機会を設けると、どうしてもそれだけで時間がかかり、時には授業時間の大半をそれに費やしてしまいます。また一人一人発言していただきますと、それぞれの受講生にしてみれば、発言していない、人の話を聞いている時間の方が長くなってしまいます。このため対策としては間違いがある場合は、その発言を聞いている他の受講生の方に意見を述べてもらうなどの方法を取りましたが、早く次に進みたいと思っておられる方もいることから、どのように効率よく会話練習なども組み込みながら授業を進めていくか、ということもお聞きしたい点です。

**参加者からの意見：**ペア・グループ分けの練習を試みては。最初に受講生に時間を与え、自分自身のことではなく、ペアの相手の紹介などをさせてみてはどうか。

## 教師として何を最終的な目標とするか。

受講生の方々の目標としては、まず重視されているのは会話などのコミュニケーションです。旅行あるいは家族との会話でフランス語が使えるようになりたい、というものです。一方で教える側の私としてもフランス文学に関わるものとしてそれだけでは少し物足りない。やはりフランス語を通じてフランス文学・フランス文化に親しんでいただきたい、という目標があります。現在、大学での研究をいかに社会に還元していくかという問題が取り上げられたりもしますが、私としても一般のフランス文学と無縁の方々に対して、少しでもフランス文学あるいは文化に興味を持っていただきたい、また面白さを伝えたいという目標があります。つまりこの受講生側、教える側の目標をいかに組み合わせていくかが、私自身のこれまでの、またこれからの課題でもあります。

**参加者からの意見：**語学以外の文化について紹介する場合、「受講生はこういったものが好きではないか」あるいは「一般的に人気のあるもの」ではなく、やはり自分が本当に面白いと思うものを紹介することが重要ではないか。そういった紹介にこそ受講生は関心を持つと考えられる。また何よりも熱意をもって教えることが、受講生の関心をひきつけることになる。

## まとめ

学生として授業を受けていた立場から、今度は授業をする側に立った時に「どのようにすれば学生がフランス語に興味を持ってくれるだろう」と考えない教師はおそらくいないであろう。そのためによりよい授業デザイン構築を目指し、さまざまな教授法を学ぶことは不可欠である。また、単調になりがちな文法説明に変化をつけるために、簡単なゲームや学生同士で行う作業など、経験者からちょっとしたテクニックを伝授してもらうことも大いに役立つ。しかし教師だけが悪戦苦闘し、試行錯誤しているようでは独り相撲になりかねない。授業は教師と学習者によって成り立つものゆえ、やはり学習者の希望・要望に耳を傾けなければならないであろう。それではどうやって相手から意見をくみ取るか、どのようにしてお互いのコミュニケーションをはかるのか。若手教員の悩みは、教師と学習者の意思疎通ができる関係の構築にあるのではないだろうか。

アトリエの参加者から、学習者からの要望をくみ上げるための方法がいくつか提案された。授業の終わりに一言感想を書いてもらい、それを教師だけでなく学習者にも披露し、両者ともに意見を分かち合う。さらにそれを無記名で記入することによって、さらに本音を（ときに教師側にとっては耳の痛いこともあるが）聞くことができるかもしれない。

しかしこのような回りくどいことをするよりも、年齢が近いことを利用して直接話しかけて、相手の懐へ入っていき相手の本音を探るほうが効果的ではないだろうか。そうすれば肌で学習者の要望を感じることができるはずである。それこそが若手教員の「強み」ではないだろうか。